

第24期 第13回 常任理事会議事録

日時 昭和63年1月18日(月) 13:30~16:30

場所 気象庁観測部会議室

出席者 山元, 関口, 竹内, 中村, 村上, 重原, 山川,
荒川, 能登, 土屋, 浅井, 河村, 松野

議事

A. 報告事項

1. 第24期第12回常任理事会議事録の確認について
一部修正のうえ確認された。
2. 各委員会報告

〔庶務〕

資料にもとづき報告があった。主なものは次のとおり。

- (1) 日本工業新聞社から「Technology Japan 88」の協賛名義使用の依頼。
- (2) 九州大学応用力学研究所1988公開研究発表会の案内。
- (3) 昭和63年度岡田賞受賞候補者の推薦依頼。
- (4) 昭和62年度京都大学防災研究所研究発表講演会の案内。

〔会計〕

資料にもとづき12月分の収支状況および第3四半期の収支状況について報告があった。昭和62年度秋季大会決算報告について報告があった。

〔天気〕

天気1月号の目次および2月号, 3月号の予定内容が示された。

〔集誌〕

気象集誌の紙質を早い時期に上質紙に変更の予定。現在編集委員長のところできめている。また、新方式による印刷を6月号(3号)から実施する予定。

〔気研ノート〕

2月上旬に161号が刊行される予定である。

〔講演企画〕

昭和63年度日本気象学会春季大会会場案内を「天気」1月号に掲載。また、シンポジウムの講演者を森山会員(日大)ほか4名に依頼した。

〔教育と普及〕

研数学館から受験生用雑誌「TRY NOW」に「学会から進路を考える」に「気象と社会との関連」

「気象学会のトピックス」「学習就職先」等について寄稿依頼があり、能登理事が原稿を作成した。

〔国際学术交流〕

- (1) インドで開催される「モンスーンに関する国際シンポジウム」へのスピーカーとして松本淳会員(東京大学理学部地理学教室)を派遣することを決めた。
- (2) 国際学术交流基金の寄付については趣意書等の文書を各団体に送付して具体的活動を実施する。

〔総合計画〕

日本学会の第14期会員候補者および推薦人の届出について、日程の通知、提出書類の送付があった。

〔その他1〕

中国科学院からゴビ砂漠で境界層、土壌水分の共同観測の申し入れがあり、昨年5月以降学術会議のWCRP専門委員会で検討を行った。これに要する費用として中国側では100万ドルを準備したので日本側もこれと同程度準備してほしいという話が山元理事長からあった。

〔その他2〕

重原理事から「水資源シンポジウム」の最終委員会について次のような報告があった。

- (1) 次の第4回も土木学会が幹事学会として実施する。
- (2) 報告書を実費で頒布する。

B. 審議事項

1. 会員の新規加入について
個人会員樋口宜寿ほか25名の新規加入が承認された。
2. 昭和63年度予算案及び事業計画案について
引き続き最終案が決定するまで継続審議としていくことが了承された。なお、外国会員のため、小切手の取り立て依頼やその他に関連して複写のとれるタイプライター方式のプリンタの購入が承認され、その費用として10万円の支出が認められた。
3. 学術会議会員候補者及び推薦人の選考について
1月18日(10時~12時)に選考委員会を開催して

会員候補者及び推薦人の選考を行った。選考の結果会員候補者として浅井富雄会員、樋口敬二会員の2名、推薦人として山元龍三郎会員、関口理郎会員、松野太郎会員の3名が選考された。これによって全理事による投票を実施することが了承された。

4. 評議員会について

山元理事長から 1. 会員の動向 2. 財政概況 3. 堀内基金奨励賞 4. 国際学術交流基金等について報告を行い、さらに担当理事から担当事務について報告を行ったあと、評議員から学会に対する意見、要望をきくことが了承された。

5. 堀内基金奨励賞選考委員会委員の委嘱について

検討の結果、松野、廣田、竹内、河村、田中(正)、樋口、駒林の各会員が候補にあり、河村会員が仮幹事となって選考委員会を開き、委員長を決め、活動を開始する。

6. 事務局職員の後任について

1月6日山元理事長、浅井理事、中村理事の3名が伊藤嘉一氏と面接を行った結果、年度末に退職する職員の後任として採用したい。かつ、主な担当は庶務と事務局全体の統轄としたいとの紹介があり承認された。



北岡竜海・関口理郎両会員，IOC（国際オゾン委員会）から顕賞される

1987年のバンクーバーの IUGG 総会は、1957～1958年の国際地球観測年 (IGY) の30周年に当たります。この30周年を記念して、国際オゾン委員会は、IGY 当時、およびそれ以降、一貫してオゾン研究に貢献してきた科学者を顕賞することになりました。全世界で25名の科学

者が選ばれていましたが、その中に、我が国から、北岡竜海・関口理郎両会員が選ばれました。

IGY 以降、日本のオゾン観測事業の功績が認められたものと思われまふ。今後共、両会員の御活躍を祈念する次第です。

編集後記：例年になく暖かい冬をむかえ、2月5日には平年より20日早く、春一番が吹きました。東北地方では、大陸から春を告げる黄砂が飛来し、茶色い雪が降ったところもありました。その後、寒さがもどり、まさに余寒の候となりました。

さて、「天気」には機関誌と論文誌の性格があります。その性格上、原稿の種類は多く、列挙しますと、論文、短報、解説、講座、総合報告、シンポジウム記事、学会だより、WCPの際、海外だより、通信欄、会員の広場、論壇、日々の衛星画像、素顔'88'、研究機関めぐり、NEWS、月例会報告、本だな、最近の研究から、気象談話室などで、ざっと20近くの欄があります。各欄の趣旨については「投稿規定」に必要最小限のことが書かれています。しかし、その趣旨が会員の方々に十分には伝わっていないようなので（編集委員の中にもいます）、「天気」の各欄の解説を近々掲載することになりました。この解説を読まれて、適当な材料がありましたら、ぜひご投稿下さい。

論文誌としての「天気」は、レフリー制度をとっています。論文の採否が話題になることがあります。著者はへとへとになりながらやっまとまとめあげたにもかかわらず、皮肉たっぷりのレフリーコメントをもらって、頭をかかえることもあるでしょう。一方、レフリーを頼まれた方々には、一銭にもならない査読に貴重な時間をさかれています。中には、きわめて読みづらい原稿に泣かされることもあるでしょう。このような著者とレフリーのパイプ役が、編集委員です。採否の分かれ目は、第一回目の revise にあるようです。この revise がスムーズに行われたものは、確実に採用されています。私の実感としては、著者とレフリーの力関係は見かけ上、レフリーの方が上ではありますが、実際は逆と思っています。といますのは、一般に、投稿論文は、多少の欠点はあるものですから。ここだけの話ですが、6月号以降の論文のストックが不足しています。投稿のチャンスです。

(K. K.)